

児童の歌唱能力に関する一考察

——小学校低学年音楽科教科書の音域について——

志 澤 彰

1 はじめに

親戚がおおぜい集まり、お年寄りの唄が始まる。唄はもちろん、その地方に古くから伝わる民謡である。どこにでもある、とくに盆や正月に帰省した、いなかではよくある光景である。そのような場に居合わせると、「お年寄りというのは唄（民謡）がうまいものだ」と感じさせられる事が多い。日本情緒豊かで心豊かに、また安らかになる。それに対して、中年以下の人たちの集まりではカラオケが始まる。非常にうまい人もいるが、聞くに耐えられないような歌、俗に言う「音痴」が必ず何人かはいる。そういう人にかぎって、ガンガンと大きな声でがなりたてるのである。歌っている本人は気持ちが良いようだが、そういう場に居合わせる者は閉口するだけである。どなたもそういう経験をお持ちなのではないだろうか。

日本の民謡は音域が非常に広く、声のコントロールが難しい曲が多い。また、日本の民謡には「こぶし」という装飾的な細かい音が多用されている。これを〔楽譜1〕の様に五線楽譜に、十六分音符や三連音符、または細かい装飾音符等を使って表わしても、的確に書き表わすのはかなり難しい。それ程、「こぶし」

〔楽譜1〕

箱根馬子唄



は細かく複雑である。そればかりか音程の跳躍も広いため、民謡を上手に唄うのは難しいのである。それに対して、カラオケでよく歌われる歌謡曲・流行歌のたぐいは民謡に比べれば相対的に音域は狭い。さらに、歌い手の「歌いやすい音の高さ」に機械的に調整して歌うことができるから、歌いやすいのである。演歌にはこぶしがあるにせよ、民謡のこぶしの複雑さに比べればはるかに簡単である。とにかく全体に歌いやすく出来ているのが流行歌である。にもかかわらず、かなり外れたまま歌う人がしばしばいるのはなぜであろうか。

民謡の上手なお年寄りたちが育った子どもの頃は、ラジオなどはまだ普及していなかった時代であった。今、カラオケで歌われるような流行歌や歌謡曲は数も

少なかっただろうし、あまり知られていなかったのではないだろうか。おそらく子どものころは、それぞれの土地の「わらべ唄」といわれるものを唄いながら育ったのである。それだけではなくその唄の数も、現代のテレビ・ラジオ等から流れてくる歌の数に比べれば、ごく限られた数の「わらべ唄」だけを唄っていたはずである。

今の子供達を含め、中年以下の人達は、テレビ・ラジオ等から多種・多様・大量の音楽を耳にして成長してきている。しかし、全ての人が歌ってきた（あるいは歌わされてきた）曲は学教教育の中で教材として歌った曲がその多くをしめる。自分の好き嫌いに関係なく学校教育では、同じ歌を歌わされながら育ってきている。

カラオケなどを勧められても「いやあ、自分は音痴だから」と歌わない人がよくいる。そういう人に聞いてみると、子供の時、「学校の音楽の試験で歌わされ、みんなに笑われた。」というような経験を持つ者が多い。たまたま、その時だけ、ちょっとはずれただけかもしれないのに、それ以来人前で歌った事はない、こういう人が非常に多いのである。本学・初等教育専攻の学生で、「歌は苦手」と自分で決めている学生について調査しても、そのような経験を持っている者がかなり多い。

現代は、いろいろなマスメディアから多種多様な音楽が流され、良い音楽であるかどうかの違い、良い音・悪い音の区別、正しい音程・はずれた音程の聞き分け、それらを耳で判断できる人は多くなっている。しかし、それらのことが判断できるという事と、それを実際に声に出して歌う事とは別の機能である。正しい音程・良い音（声）で歌うためには、耳で良いと感じた音を、そのとおりに発する発声の機能訓練がされていなければ、思ったとおりの正しい音程・良い音（声）で歌う事はできないのである。したがって、その機能訓練をする、つまり実際に声に出して歌うという事をしなければ、良いと感じる耳を持ってもそれを表現することはできない。つまり歌うことに関しては「本当の音痴」になってしまうのである。カラオケのうまい人は、「彼は元手がかかっているから。」などと評価される。そうではなくて、その人はそれだけ機能訓練の機会を（必ずしも良い方向でとは限らなくても）多く持っているわけであり、その効果が表れているのである。

二 2 「音痴」とは

では、「音痴」とはどういう状態をいうのであろうか。国語辞典（三省堂）では、「歌を正しくうたえない・こと（人）。（音楽などが）まったくわからない・こと（人）。」広辞苑（岩波書店）では、「生理的欠陥によって正しい音の認識と記憶や発声ができないこと。また、そういう人。俗には、音楽的理解の乏しいことや、そのため正しい音程で歌えないこともいう。」と示している。また、標準音楽辞典（音楽之友社）では、「狭義には音の高さの弁別力の貧弱なものをいう。

通俗的には歌唱に際して音程のきわだったくずれを出すものをいっている。また広く音楽的聴覚的因子の貧困にたいして意味する社会的習わしもある。」としている。これら各書に出てくる、「正しくたう」・「正しい音」・「正しい音程」・「音の高さの弁別力の貧弱なもの」・「音程のきわだったくずれ」、これらはどの程度の状態をいうのであろうか。機械を持ち出し、何の音は何Hzで歌えれば合っていて、何Hz以上はずれると音痴になるというように、機械の測定だけでは済まされないものであろう。「音痴」である事と、「音痴」ではない事の区別、これは主観的な感覚が大きくかわることなので非常に判断の難しい問題である。したがって、普通の人が聞いてある程度「うまい」と思われる歌唱と、専門家が聞いて、音痴とは言わないまでも「正しい音程」とはいえない状態とでは、かなり差があるわけである。

では、「音痴」になってしまう人は、どのような理由で、いつからそうになってしまうのであろうか。「音痴」はどのようにして作られてしまうのであろうか。

3 児童の音域

私は、これまでに十数年間の児童合唱団の指導を通して、約170名の子供たちと共に合唱活動をしてきた。また、約130名ほどの幼児・児童に対する個人的なソルフェージュの指導もしてきた。小・中学校全学年の音楽授業を2年間にわたって受け持った経験もある。それらの経験を、(専門家としての多少厳しい見方で)まとめて言えることは、小学校低学年の児童は、ほぼ全員が「音痴」だと言ってよい。もちろん、特別な音楽的訓練を受けているごく一部の児童は別である。しかし、合唱団の中で1年・2年と歌っているうちに、「ほぼ全員」が、音程もよく・声もきれいになり、非常に美しいハーモニーを作れるようになるのである。

小学校入学時(満六歳になったばかりの児童から、すぐ、あるいは入学式の日までに満七歳になっている児童までいる。)の児童はどの程度の音域(声域)を持っているのであろうか。前述のような経験から言うならば、その音域は四度くらいと言ってよい。音域が四度とは、たとえば、ドからファ[p.49譜例4~7参照]までの事を言う。それ以下しか(つまり狭い)音域のない児童も多数いることはもちろんである。

ラ(イ)~レ(ニ)〔譜例2~5参照〕しか出せない、児童としては以外に音域が低いと思われる児童が2割近くはいる。ド(ハ)~ファ(ヘ)〔譜例4~7参照〕の音域の児童が2~3割くらいであろう。中には低い音域は不安定で、ラ(イ)~レ(ニ)〔譜例9~12参照〕くらいの高い音域の児童も結構多い。こういう児童は自然に頭声発声を身につけている児童である。以上のように、児童の音域は個人により1オクターブも違うことも多いのである。しかし、全ての児童がこのように音域が狭いというわけではない。

小学校入学時で、ソ(ト)~ソ(ト)〔譜例1~15参照〕の2オクターブを正確に歌える児童もいた。私は、この時期でこれほど広い音域を持っている児童はこの

子一人しか知らない。その子は、母親が歌が好きで、毎日一緒にいろいろな歌を歌うという経験を持っていた。そうした「環境」がその子にはあった。

では、ド(ハ)～ソ(ト)〔譜例4～8参照〕のたった5音を、ある程度正確に歌える児童はどのくらいいるのであろうか。「ある程度正確」という表現は、主観的な問題であるだけに非常に難しいのであるが、私は、多く見ても3割くらいではないかと考える。あとの音域は、歌っている本人は、出しているような気持ちになっているだけで、近い音程ではあっても、多少厳しく見るとずれている状態だと言ってよい。小学校入学時の児童の音域とは、そのくらいの狭いものだと考えるのが妥当であろう。

いままで述べてきたことは、小学校入学時の頃の状態についてである。児童の成長は全ての点で非常に早い。からだ自体の発達・声帯の発達・音感の発達・全ての点においてそうである。しかしまた、個人的な差も大きい年代でもある。1年後には、あらゆる点で大きく成長する（それには適切な指導が不可欠であるが）児童もいる。しかし、1年たってもあまり変わらない児童もいる。

かつて、小学校1年の1学期を終えたA君の母親から相談を受けた事があった。A君は小学校の担任の先生から、A君本人を前にした個人面接で、「お宅のお子さんは音痴ではないかと思われるので気をつけて下さい。」と、言われたというのである。そのA君は、私が4歳時からソルージュ等を指導していた生徒であり、A君の音感については十分に理解していた。それゆえに、私は、「絶対に、君は音痴なんかじゃないよ」と、はっきり言うことができた。A君も母親もかなり声が低く、ハスキーなのである。当時、A君はラ(イ)～レ(ニ)〔譜例2～5参照〕は非常に安定した音程で歌うことができた。その下のソ(ト)〔譜例1参照〕もほぼ確実にだせる状態であった。しかも、耳はよく、聴音ならば、自分の声より1オクターブくらい高い音でも確実に聞き取る事ができていた。

こういう児童は音痴とはまったく違うのである。単に普通の児童よりもともと持っている音域が低いだけなのである。たった一度しか歌わせないテストで判断してしまったのか、単に担任教師の音楽的無知がそうさせたのかはわからない。音楽専科の先生を置いている小学校はまだ少なく、置いても高学年だけの担当という小学校がほとんどである。そして、音楽と体育の授業は交替で隣のクラスの女の先生が担当する、などという状況が今もあるのが現実であり、このような事は今も充分起こり得る事である。A君の事は極端な例かもしれないが、いずれにしろ、そのようなことを本人を前にして言うことは、教師として絶対に許しがたい行為である。そのA君は、今、大学受験を控えているが、毎日ピアノを弾きながら歌って（ロックやニューミュージック等）からでないと勉強しないと、A君の母親から聞いている。音痴や音楽嫌いにならずに、大人になったことは本当によかったと思っている事例である。

4 小学校「歌唱」教材の問題点

では、A君が試験を受けたような小学校の「歌唱」教材はどのくらいの音域の曲で出来ているのであろうか。現在出版されている小学校音楽科の教科書全4社（音楽之友社・教育芸術社・教育出版・東京書籍）の全ての歌唱教材の音域を〔表1〕のようにまとめてみた。この表では、同じ音域（たとえば、ドから1オクターブ上のドまでのように）の曲数が多いものから並べ、いろいろな音域の曲は「その他」としてまとめた。さらに〔図1〕は、〔表1〕をグラフにまとめたものである。横が音域・縦がその音域の曲が使われている率（％）である。音域の広い曲が下で上に行くほど音域の狭い曲になっている。同じ音域の曲同士は、最低音が低い曲を下にして表すことにした。この表をまとめるに当たって「歌唱」教材として集計した曲は、歌唱のための教材だけでなく、「器楽（合奏）」教材あるいは「鑑賞」教材であっても、歌詞の付いている曲で、歌唱を伴って授業に用いられる可能性の高い曲は含めることにした。文部省の定めた「歌唱」共通教材は各社とも含めるようにした。巻末近くには、全4社とも全学年に「君が代」を載せているが、これは各学年の歌唱能力を考慮して載せられたものではないと思われるので省くことにした。〔表1〕および〔図1〕から、以下のような事が言えそうである。

- (1) 曲の音域が、ド(ハ)～ド(ハ)〔譜例4～11参照〕とレ(ニ)～レ(ニ)〔譜例5～12参照〕の完全8度（1オクターブ）と、ド(ハ)～レ(ニ)〔譜例4～12参照〕の長9度（1オクターブと長2度）でできている曲が圧倒的に多い。
- (2) 1年では、音域の狭い曲は完全5度であり、広い曲は1オクターブと短3度である。6年では、音域の狭い曲は短6度であり、広い曲は1オクターブと完全5度である。以上のように、ほぼ学年が進むにつけて音域も広がる。
- (3) 完全5度より音域の狭い曲が全歌唱教材の中でわずか5曲と、非常に少ない。

(1) 曲の音域が、完全8度（1オクターブ）と長9度（1オクターブと長2度）でできている曲が圧倒的に多い、ということについてもう少し詳しく見ていくことにしよう。ド(ハ)～ド(ハ)〔譜例4～11参照〕とレ(ニ)～レ(ニ)〔譜例5～12参照〕の完全8度（1オクターブ）と、ド(ハ)～レ(ニ)〔譜例4～12参照〕の長9度（1オクターブと長2度）および、それ以外も含めた音域1オクターブ以上の曲数とその代表的な（共通教材の）曲名、およびその曲数の全体の曲数にしめる割合は、〔表2〕のようになる。

学年が進むにつれて音域の広い曲が増えてくる。ここに2つほど問題があることに気付く。その1つは「低学年の児童に、これほど多くの、広い音域の曲を実際歌う事が出来るのだろうか。」という問題。もう1つは、男子の場合、成長の早い児童で5年時あるいは6年時には、変声期に入ってしまう者もかなりいる。

〔表 1〕 小学校教科書「歌唱」教材の音域表

1 年 （4 社合計117曲）

音 域	ド～ド (ハ～ハ)	ド～レ (ハ～ニ)	ド～ラ (ハ～イ)	レ～レ (ニ～ニ)	ド～ソ (ハ～ト)	ファ～レ (ヘ～ニ)	その他
曲 数	40	25	15	9	7	6	15
率	34.2	21.4	12.8	7.7	6.0	5.1	12.8

2 年 （4 社合計123曲）

音 域	ド～レ (ハ～ニ)	ド～ド (ハ～ハ)	レ～ド (ニ～ハ)	レ～レ (ニ～ニ)	ファ～レ (ヘ～ニ)	ミ～ド (ホ～ハ)	その他
曲 数	33	29	10	7	7	5	32
率	26.8	23.6	8.1	5.7	5.7	4.1	26.0

3 年 （4 社合計110曲）

音 域	ド～ド (ハ～ハ)	ド～レ (ハ～ニ)	レ～レ (ニ～ニ)	レ～ド (ニ～ハ)	シ～ミ (ロ～ホ)	シ～ド (ロ～ハ)	その他
曲 数	27	21	19	9	5	4	25
率	24.5	19.1	17.3	8.2	4.5	3.6	22.7

4 年 （4 社合計104曲）

音 域	ド～レ (ハ～ニ)	ド～ド (ハ～ハ)	ミ～ミ (ホ～ホ)	レ～レ (ニ～ニ)	レ～ミ (ニ～ホ)	ド～ミ (ハ～ホ)	その他
曲 数	25	17	12	8	8	6	28
率	24.0	16.3	11.5	7.7	7.7	5.8	26.9

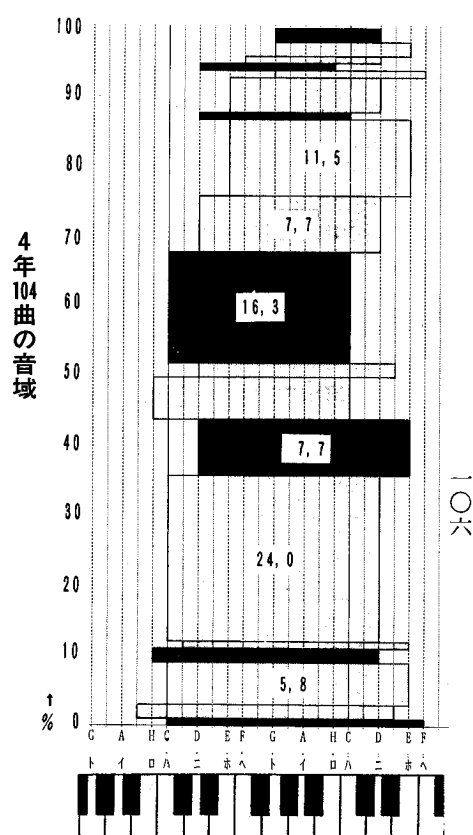
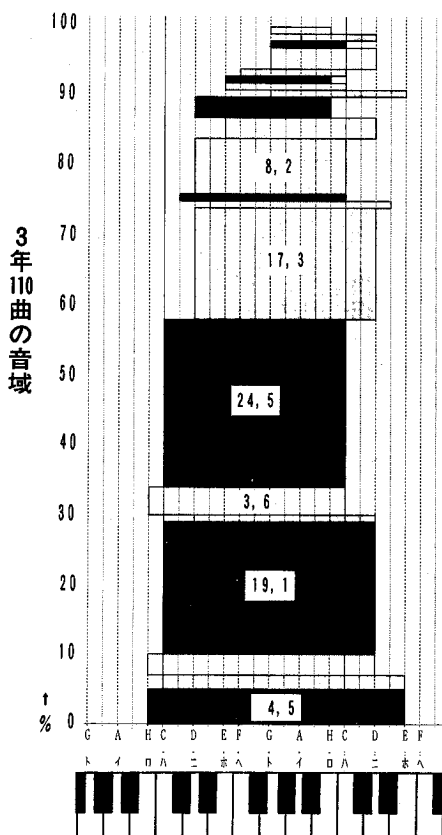
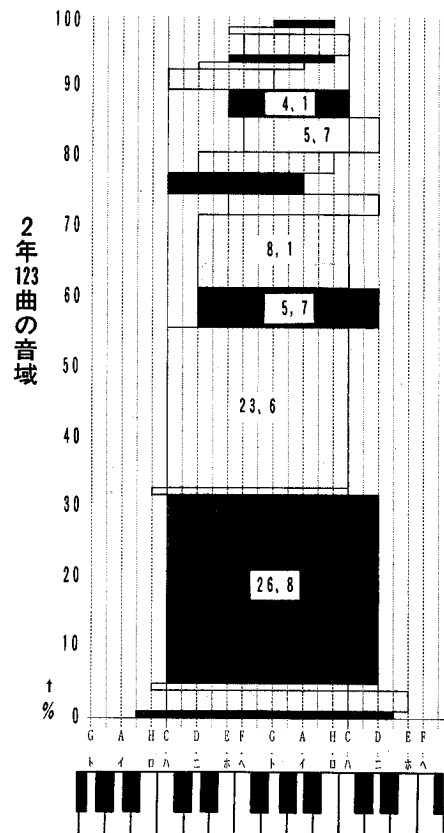
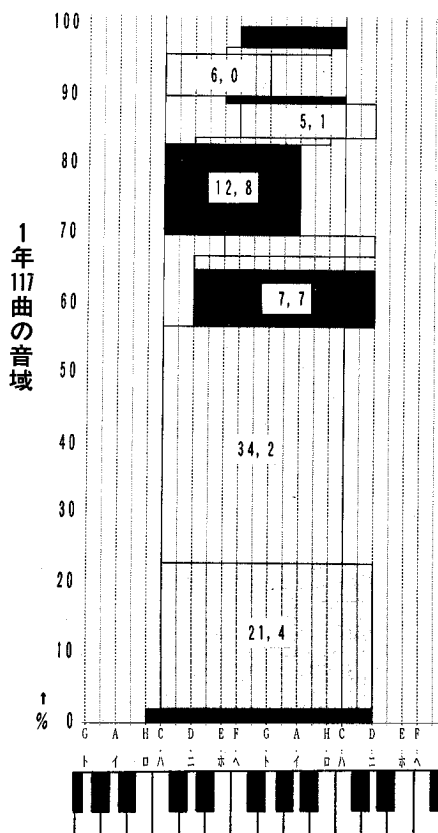
5 年 （4 社合計 91曲）

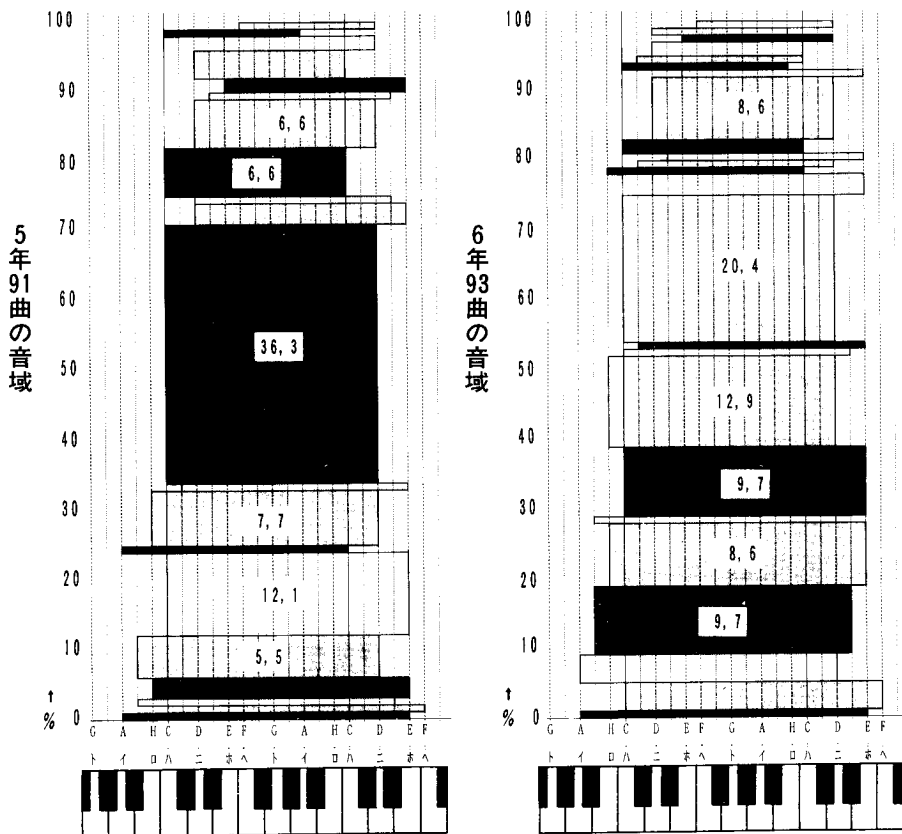
音 域	ド～レ (ハ～ニ)	ド～ミ (ハ～ホ)	シ～レ (ロ～ニ)	ド～ド (ハ～ハ)	レ～レ (ニ～ニ)	♭シ～レ (変ロ～ニ)	その他
曲 数	33	11	7	6	6	5	23
率	36.3	12.1	7.7	6.6	6.6	5.5	25.3

6 年 （4 社合計 93曲）

音 域	ド～レ (ハ～ニ)	シ～レ (ロ～ニ)	♭シ～♭ミ (変ロ～変ホ)	ド～ミ (ハ～ホ)	シ～ミ (ロ～ホ)	レ～レ (ニ～ニ)	その他
曲 数	19	12	9	9	8	8	28
率	20.4	12.9	9.7	9.7	8.6	8.6	30.1

〔図一〕 小学校教科書「歌唱」教材の音域図





〔表2〕 学年別・音域1オクターブ以上の曲数のしめる割合

学 年	1	2	3	4	5	6
全曲数	117	123	111	104	91	93
曲 数	76	78	77	90	83	86
曲 名	かたつむり うみ 他	夕やけこやけ 虫のこえ 他	春の小川 茶つみ 他	まきばの朝 もみじ 他	こいのぼり スキーのうた他	われは海の子 おぼろ月夜他
率(%)	65.0	63.4	69.4	86.5	91.2	92.5

一〇五
その変声期という実態と音域の広い曲がこれだけ多く取り入れられていることに、どのような考慮がなされたのであろうか、という問題である。(この変声期の問題に関しては、今回は問題提起だけにしておく。)

(2) 学年が進むにつれて音域も広がる、ということについて。学年別に最小(狭い)音域とその曲数および曲名・最大(広い)音域とその曲数および曲名をそれぞれ〔表3〕にまとめた。

まず、音域の狭い曲が、低学年に多く集まっていることに気づく。しかし、2・3年生より1年生の曲の方が音域が広いのはなぜであろうか。この点については

[表3] 学年別・最小・最大音域とその曲数および曲名

学 年	1	2	3	4	5	6
最小音域	完全5度	長3度	長3度	完全5度	長6度	短6度
同上曲数	12曲	1曲	1曲	2曲	2曲	1曲
同上曲名	ちょうちょう ぶんぶんぶん 他	おちゃをのみ に	夕やけこやけ	ちょうちょう かっこうと ろば	こげよマイ ケル 鳥の声	四季の歌
最大音域	1オクターブ と短3度	1オクターブ と完全4度	1オクターブ と完全4度	1オクターブ と完全4度	1オクターブ と完全5度	1オクターブ と完全5度
同上曲数	2曲	2曲	5曲	3曲	1曲	1曲
同上曲名	あめふりく まのこ いぬのおま わりさん	シャボンだま (2社)	ピクニック すずめがサ ンバ 他	おどれサンバ 北風こぞう の寒太郎 他	空がこんなに 青いとは	空がこんなに 青いとは

後述することにする。音域の広い曲に関しては、5年・6年ともにラ(イ)～ミ(ホ)〔譜例2～13参照〕の「1オクターブと完全5度」もの広い音域の曲が入っている。これより1音だけ狭い(1オクターブと完全4度)曲が5年に5曲、6年には25曲も入っている。その中には、最高音がさらに高いファ(ヘ)〔譜例14参照〕を歌わなければならない曲が5年に1曲、6年に4曲もある。こんなに広い音域・高い音が普通の小学校教育(音楽専科の先生がいたとしても)の中で適切に指導され、正しく歌われているのであろうか。低いラ(イ)〔譜例2参照〕を出すことが出来る児童は、女子では2～3割、男子でも半数くらいのはずである。高いミ(ホ)〔譜例13参照〕・ファ(ヘ)〔譜例14参照〕を、(完全にとは言わなくても)ある程度いい発声といい音程で歌える児童は、多く見ても女子で2～3割、男子では変声期をむかえていないボーイ・ソプラノがクラスに一・二人いるかないか程度ではなかろうか。つまり、小学生でこんなに広い音域の曲を歌う事ができる児童は、クラスで1割いるかないか程度だと考えるのである。このように、大半の児童に無理のある曲を授業で扱ったのでは、音楽嫌いを増やしたり、音痴を作ってしまう原因になりかねない。「歌は好きだけれど、音楽の授業は嫌い。」という児童が以外に多いのも、こんなところに原因があると思われる。





(3) 完全5度より音域の狭い曲が非常に少ない、ということについて。〔表3〕のように小学校1年生と4年生以上の教科書には、完全5度より音域の狭い曲はない。2・3年の教科書に出てくる完全5度より音域の狭い曲、5曲をまとめると〔表4〕のようになる。

〔表4〕を見ると、音楽之友社2年の「にいちゃんが」というわらべうた(絵かき歌)を除いて、音域は狭くてもわりに高い音域の曲が多い事がわかる。それは、本来は「器楽」教材の曲に歌詞をつけている、あるいは「歌唱」と「器楽」の両方に使える曲として載せられている曲だからである。器楽の導入時に無理の

〔表 4〕 完全 5 度より音域の狭い曲

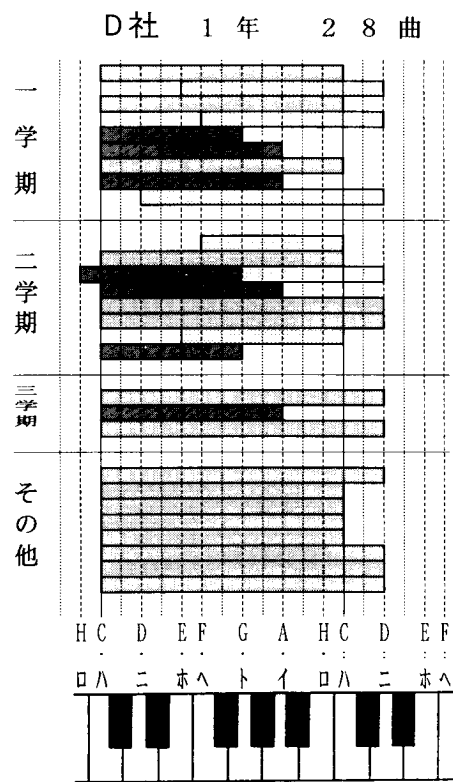
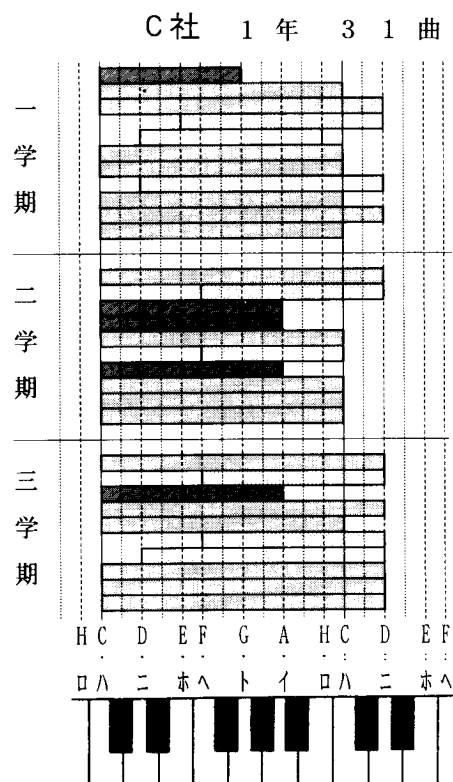
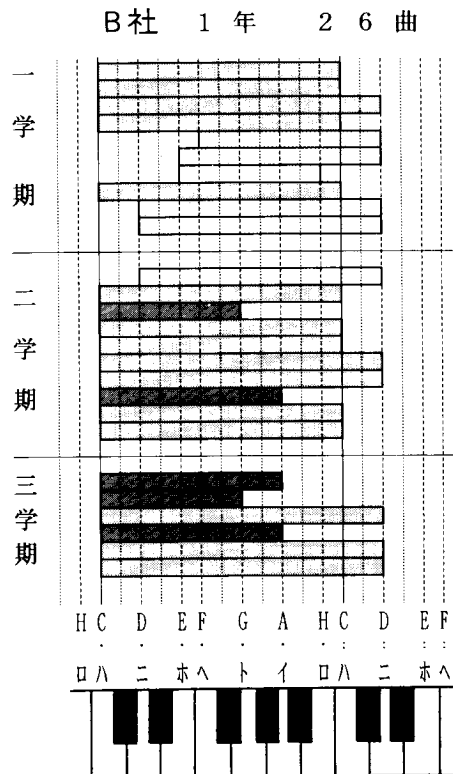
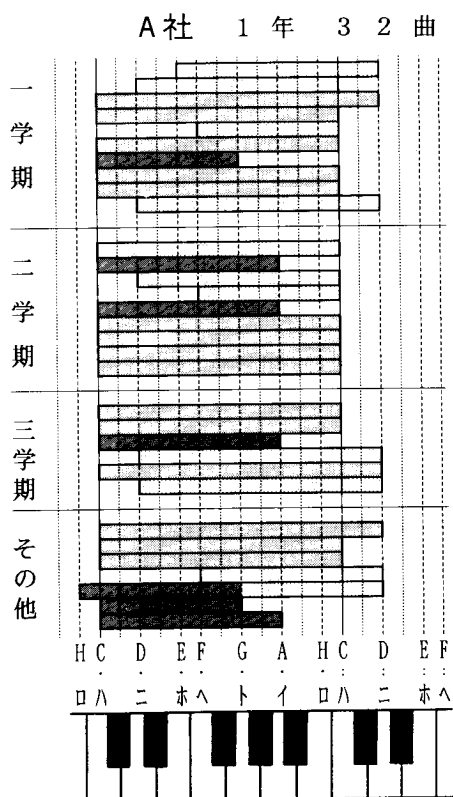
学 年	2	3	2	3	3
曲 名	おちゃをのみに	夕やけこやけ	にいちゃんが	ハイキング	手をつなごう
出 典	わらべ歌	わらべ歌	わらべうた	ドイツ民謡	アメリカ民謡
音 域	長 3 度	長 3 度	完全 4 度	完全 4 度	完全 4 度
最高音	シ ($\dot{\text{c}}$)	シ ($\dot{\text{c}}$)	ラ ($\dot{\text{e}}$)	レ ($\ddot{\text{e}}$)	ド ($\ddot{\text{a}}$)
最低音	ソ ($\dot{\text{b}}$)	ソ ($\dot{\text{b}}$)	ミ (c)	ラ ($\dot{\text{e}}$)	ソ ($\dot{\text{b}}$)
出版社	東京書籍	教育書籍	音楽之友社	音楽之友社	東京書籍

ないように、数少ない音から練習を始める。小学校 3 年生から取り入れられるリコーダーの場合、左手だけの運指で演奏できる、ソ ($\dot{\text{b}}$) ～レ ($\ddot{\text{e}}$) [譜例 8 ～ 12 参照] の音だけでできている曲が入っているためである。また、出典をみると「わらべ歌」と「外国民謡」だけになっている。つまり、音域の狭い曲には、現代の曲あるいは教科書を出版するために新たに作曲された曲は 1 曲も入れてないことがわかる。

前述のように、小学校 1 年生の教科書には、完全 5 度以上の広い音域で出来ている曲しかない。しかし、「3 児童の音域」の項でも述べたように、1 年生の音域 (声域) は以外に狭く、個人差も著しい。では、そうした 1 年生は入学してから教科書で、どの程度の音域の曲に接するのであろうか。〔図 2〕は、1 年生の教科書に出てくる歌唱教材の音域を、掲載順にまとめたものである。とくに多いド ($\ddot{\text{a}}$) ～ド ($\ddot{\text{a}}$) [譜例 4 ～ 11 参照] とド ($\ddot{\text{a}}$) ～レ ($\ddot{\text{e}}$) [譜例 4 ～ 12 参照] の音域の曲には  で色分けし、それより比較的音域の低い曲には  で、比較的音域の高い曲には  でそれぞれ色分けした。〔図 2〕を見ると小学校 1 年生としては音域の広い、ド ($\ddot{\text{a}}$) ～ド ($\ddot{\text{a}}$) とド ($\ddot{\text{a}}$) ～レ ($\ddot{\text{e}}$) の音域の曲 ( の部分) がいかに多いかが、よく解る。A 社の教科書は、2 学期前半までは音域のあまり広くない曲が集められている。しかし、B 社の教科書は、26 曲中 18 曲が 1 オクターブ以上の曲で、1 学期から比較的高い音域で歌う曲が集中している。C 社の教科書は、31 曲中 25 曲が高いド ($\ddot{\text{a}}$) [譜例 11 参照] 以上の高い音を必要とし、音域の広い曲がもっとも多い教科書と言えよう。D 社の教科書は 1 学期から 3 学期までの 20 曲中 10 曲が 1 オクターブ未満で歌える曲になっていて、巻末には音域の広い曲も載せられている。

以上のように、私の児童に対する歌唱・ソルフェージュの指導経験から考えると、今の教科書の曲は音域が広すぎて、正しく歌うあるいは、児童が自分でも満足して楽しく歌うことができるのは、ほんの一部の児童だけになってしまうことであろうと感じざるを得ない。とくに低学年においては、発声機能が未発達なだけにこの問題は大きい。

〔図2〕 一年歌唱教材の音域



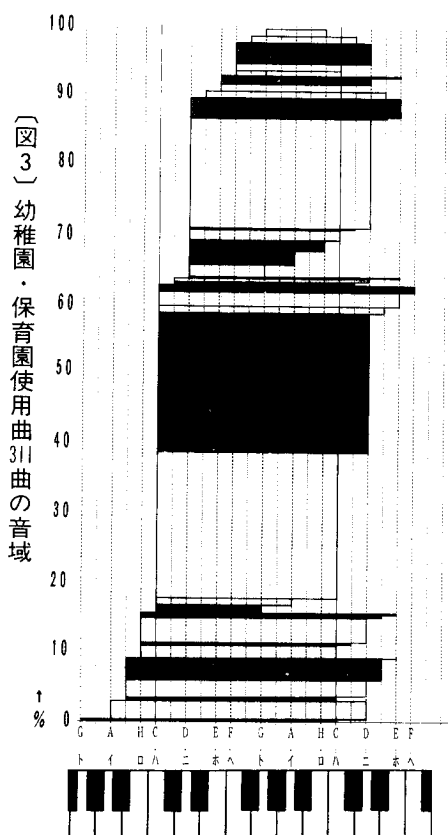
5 保育園・幼稚園児の歌唱経験について

では、小学校に入学する以前の歌唱経験はどうなっているのでしょうか。未就学児にとっては家庭環境とくに母親からの影響が大きい。しかし現在は、全国どの地域でも4歳・5歳児の就園率はかなり高くほとんどの4・5歳児が保育園または幼稚園に通っている。では、その保育園または幼稚園教育での歌唱指導はどうなっているのでしょうか。園児は、小学校入学児より発声機能・音感・声域等あらゆる点で未発達である。園児たちが歌う、歌唱教材の音域を〔図3〕にまとめてみた。参考にしたのは、「幼稚園教諭・保育養成課程用 幼児の音楽教育」（音楽教育研究協会編）・「幼児保育のための音楽リズム」（東亜音楽社）「幼稚園・保育園でおぼえる歌 ベスト100曲集」（全音楽譜出版社）におさめられている計311曲についてである。同じ曲が2冊以上に載っている、あるいは、おなじ曲が別の本では違う高さの調（ハ長調とニ長調で、というように）で載っている場合もあるが、それだけ利用頻度が高いからと考え両方とも数えることにした。〔図3〕には、その曲の最低音が、最も低い曲から高い方へ順に並べてみた。

〔図3〕から、小学校の教科書の曲に比べ、音域の狭い曲が比較的多いことがわ

かる。ド(ハ)～ソ(ト)〔譜例4～8参照〕やレ(ニ)～ラ(イ)〔譜例5～9参照〕などの5度以内の曲、ファ(ヘ)とソ(ト)〔譜例7と8参照〕の2音のみからできている曲も載っている。小学校教科書の曲のように、ド(ハ)～ド(ハ)または、～レ(ニ)までの曲が圧倒的に多いという事はないが、ソ(ト)〔譜例1参照〕などの低い音の必要な曲、ミ(ホ)やファ(ヘ)〔譜例13・14参照〕などのかなり高い音を必要とする曲が入っている。

このような、音域の広い曲を幼児が正しく歌う事はほとんど不可能である。歌詞やリズムのおもしろさなどで幼児が楽しめる曲なので、これらの幼児期の歌集に載っているであろうと思うが、使い方には充分注意が必要である。幼稚園などの指導者は、「聞いて楽しむこと」と、楽しくかつ「正しく歌えること」と



の区別をしっかりとつけて、これらの曲を使ってほしいものである。

6 児童（幼児）が楽しく・正しく歌える曲

前期の幼稚園の歌唱教材のうち、音域の狭い曲の題名は、「グリコ」・「ゆうびんやさん」・「おせんべ」・「お寺のおしょうさん」・「おちゃらか」・「たけのこいっぽん」・「棒が一本あったとき」などである。これらの曲は、かなり古くから唄われていた曲で、手や体を動かして遊びながら歌う「わらべ唄」の領域に入るものである。「グリコ」は、じゃんけん、「ゆうびんやさん」は、縄跳び、「おせんべ」は、手遊び、「お寺のおしょうさん」と「おちゃらか」は、手合わせをしてじゃんけん、「たけのこいっぽん」は、鬼遊び、「棒が一本あったとき」は、絵かき唄といった具合である。

私がかつて訪問したある幼稚園の園児たちの歌は、「歌う」というより大きな声でどなる、かなりたてるだけの歌唱(?)であった。幼児の発声可能な音域を無視した選曲や、「さあ、元気よく歌いましょう」だけの歌唱指導では、音域外の音は、全て「はずれたまま歌うくせ」をつけてしまうだけだ。そのような状態に慣らされてしまうと、本人には、それがはずれて歌っているという事がわからなくなる。そのまま成長してしまうと、耳では音程を正しく聞いても、その音程で声を発する事が出来なくなる。つまり、いわゆる「音痴」という状態となり、そのまま育ってしまうわけである。

柴田南雄作曲「北越戯譜」（全音楽譜出版社）という児童合唱用のシアターピースがある。この作品では、江戸時代から伝承されてきた子供の唄と遊びを、現代の子供の世界によみがえらせることを意図している。ここでいう「北越」とは、新潟県の北魚沼郡・南魚沼郡・十日町・長岡市などの地方のことである。それらの土地に伝わる、お手玉うた・羽根つきうた・まりつきうた・ふうせんつきうた・鳥追いうた等12種類の「わらべ唄」を実際に演技し（遊び）ながら歌い、それらを自由に組合せ、重ねあわせて演奏する合唱曲である。この曲の一つに「わら鉄砲」〔楽譜2参照〕という曲がある。本来は、秋の十五夜の飾りの後、豊作を祈願して、里芋のずいきを地面にたたきつけながら唄う曲である、と地元の方に聞いた。

〔楽譜2〕 わら鉄砲 柴田南雄作「北越戯譜」より

とう か や の わらでつぱう そ は くっちゃ ま ま くっちゃ ぼ-んとせ ぼ-んとせ 開始音

この曲の楽譜はラ(イ)から書いてあるが、楽譜の終わりに開始音としてラ(イ)と共にミ(ホ)が指定されている。つまりどちらの音から歌っても良い、また同時にその二つの音から歌い始めてもよいというのだ。この作品では多くの曲にこのように、完全4度ずれた音から歌い出す事が指定されている。これだと、声の高

い子も低い子も歌いやすくなる。このことは、歌いやすくするためにこのような指定がなされているわけではない。柴田南雄氏著の「改訂版 音楽史と音楽論（放送大学教育振興会 昭和63年刊P.73）」にも書かれているが、子供たちがわらべ唄などを歌っている時に、前述のような4度のずれが自然に起こっていることをもとにしての指定である。

個人個人によって歌いにくい高い音や低い音を無理せず、ずらして歌うことを子供たちは遊びの中で自然にやってきたのである。たとえば、何人かの子供たちが集まって、「まりつきを」歌いながら始めたとしよう。途中でまりをころがしてしまふなどのため、少し遅れてつき始める子が、同じ高さで歌い始めればカノンのような形になる。それを4度ずれた高さで速さも変わって始めれば、フーガのような形になる。あるいは、同時に始めても、4度ずれた高さで始めれば、平行オルガヌムのような形になる。こういうことは「楽譜（スコア）の形に書いて練習するとしたら、ほとんど不可能なくらい難しいだろう。しぜんの動作の中だからこそ、容易に行なえるのである。」と柴田南雄氏は「日本の音を聴く（青土社 1987年刊 P.259）」の中に書いている。

冒頭に書いたように「民謡のうまいお年寄り」達は、子供の頃このような経験を自然に積んできたのである。このような曲をもう一度見直す必要があると思われる。小学校低学年の「歌唱」教材にも「わらべ唄」、あるいは「わらべ唄」のように、音の数も少なく音域の狭い歌、どの子にも無理なく、遊びながら楽しむ事が出来るような歌、そのような曲をもっと取り入れるべきである。とくに、幼児期や小学校低学年時にはこのような経験が大切だと痛感してやまない。私が児童合唱団と前記の曲「北越戯譜」を演奏したとき、団員たちは生き生きとしてステージも客席通路も使い、遊び歌っていた。団員だけでなく観客も共に遊び、共に歌い楽しむという状態が自然におきてきたのである。あの実感からそのように確信するのだ。

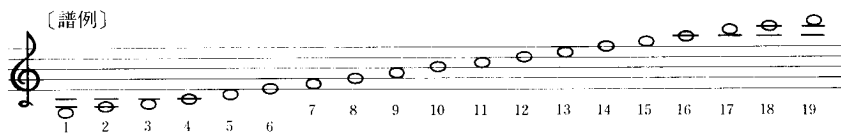
7 むすび

以上のように、小学校低学年くらいまでの児童は、音域も狭く音程も不安定である。その意味では、ほとんど全ての児童が「音痴」であるとも言える。しかし、音楽的に良い環境や正しい指導がなされていれば、ほとんど全ての児童が正しい音程で歌うことができるようになるはずだ。その意味では、子供に「本質的な音痴」はない。それは、両親が日本人でも、海外で英語だけの生活の中で生まれ、育てられた子供は、自然に英語をしゃべるであろう。しかし、日本語はまったくしゃべる事はできないはずだ。このようなこととほぼ同じことだ。子供の成長過程に、正しい音程を聞く、正しい音程で歌うという環境があったかどうかで、その子供の音感は決まってしまうのである。

児童合唱団で多くの児童を指導してきた経験からみると、週1回または2回の指導だけで、多くの児童は、1年もたたないうちに1オクターブ以上の音域を歌

えるようになる。3年4年と続けている児童は、半数以上が2オクターブ以上の音域をかなり正確に歌い、美しいハーモニーをつくる。半数近くあるいはそれ以上の児童は、高いド(ハ)〔譜例18参照〕やレ(ニ)〔譜例19参照〕まで出せるようになる。ここまで高い音になると、ソプラノの声楽歌手と同じくらいの音域をもったことになる。ところが、3年4年と続けていても、1オクターブ半くらいまでしか音域が広がらない児童もいる。上はミ(ホ)かファ(ヘ)〔譜例13・14参照〕がやっと出せる程度の児童が2～3割はいる。こういう児童の多くは、逆に下のラ(イ)とかソ(ト)〔譜例2・1参照〕を出すことができる。高い音は、練習の方法次第でほとんどの児童はどんどん延びていく。児童合唱団で低い音を出せる児童は貴重な存在である。低い音は、もともと持っている声帯が厚いか・長くないと出せないからである。こういう声帯を持った児童は少ないのである。逆に高いド(ハ)〔譜例18参照〕まで出せるような児童は、ほとんどの場合、下のド(ハ)やレ(ニ)〔譜例4・5参照〕が出せなかったり、出せたとしてもかすれた声であったり、音程が不安定であったりする。どちらも持って生まれた声帯の個性だと言ってよいであろう。

合唱団では、いろいろな個性があってこそ、ソプラノ・メゾソプラノ・アルトというようにパート分けができ、「合唱」になるのである。学校教育の中では、授業時間数の問題などいろいろな制約はあるのであろうが、こうした子どもたちの発声上の個性を大事にし、それを生かした「歌唱」指導の進め方がなされることを期待してやまない。



(本学専任講師・初等教育)